

## 趙樹理の父の死

加藤三由紀

一九八六年五月、趙樹理の故郷、山西省沁水県尉遲村を訪れた。尉遲村は、沁河の西岸にあり、同じ太行山脈の中にあつても、かさかさに乾いた山地の村々と比べると、格段に豊かである。沁河に沿って十五キロ北上すると沁水県東部の中心地端氏鎮、南に二十キロ下れば隣県の具城陽城に出る。晋東南部の中心都市長治市へは、二百キロ弱の道のりである。尉遲村は趙樹理の作品の多くに投影されているが、特に『李家莊的變遷』(一九四六年一月初版)には、その地理的位置、登場人物、風物などにおいて、尉遲村の面影が色濃く見られる。

一九四五年、日本の降服後、趙樹理は八年近く帰ることのできなかつた故郷を訪れた。

(趙樹理が) 目にしたものは、『李家莊變遷』の中で、鉄鎖が帰郷した時に見た光景そのものだった。今回の帰郷は、『李家莊的變遷』を讀者に贈ってくれたのみならず、とても嬉しい知らせをもたらした。——虎兒が当地の軍政学校に上つたのである。

この時、趙樹理を待っていたもう一つの知らせが、父の死であつた。当時の情況は、『趙樹理伝』などに簡潔に述べられているが、同じ時に父と兄とを亡くした閻振江(陽城県望川村在

住、当時十五歳)の口述を中心<sup>(5)</sup>に、ここに詳しく書き留めておきたい。

趙樹理の父趙和清が虐殺に遭つたのは、一九四三年、旧曆九月三十日(新曆十月二八日)<sup>(6)</sup>のことである。

その日の明け方、村に二十数名の日本兵がやって来た。趙和清は蜂蜜を持って出かけようとした矢先に捕まつた。日本兵は、沁河が沁水県から陽城県にぬけようとするあたり一帯の村々から、農民をかりだし、尉遲村の南三キロほどの所にある隣村、陽城県望川村に連れていった。彼らは農民を村の南の坂の上にある大坡南院に集めると、脱穀場で殴りあいさせた。それから、二人ずつ連れ出し、「挑糞口」「茅廁」と呼ばれる便所の壁の一部を穿つて作つた汲取り口をふさいである大きな石をはずして、「茅坑」(地面を深く広く掘り込んで作つたおとしだめ)の中に飛び込ませた。自分から動こうとしない者は、さすまたで刺され、投げ入れられた。茅廁は、貴重な肥料の供給源として各戸が持つており、広さは約一・五メートル四方、石やれんがで築いた壁で囲まれており、独立した小さな家様になつている。連行した農民を生き埋めにする長い間、村中が凄惨な叫び声に包まれた。

捕捉された農民のうち、難を逃れ得たのは、少年一人だけだつた。彼は大坡南院から抜け出し、村の東を走る沁河の流れに身を潜めたのだつた。

既に、茅坑の中は血の海と化していたが、日本兵は、茅坑の

天井となつてゐる茅廁の足場と周囲の壁をとり除き、人々の上に石を積み重ね、更に、鍋に沸かした熱湯をあびせかけ、それでも安心できずに、枯草や薪を積んで焼いた。その後、しばらくの間、生きた人間の声が聞こえてきたが、日本兵が残つていたために、村人は彼らを助けることもできなかった。

翌日、更に大勢の日本兵がやって来、略奪を行なつた。

三日たち、日本兵が引き上げると、村人は死者をすくいあげ、大坡南院から村の入口まで、五百メートルほどの坂道に、一人一人ならべて、自分の父を、兄を捜したが、遺体は無残な状態で、衣服のつぎあて等を頼りに捜すしかなかった。当時八歳だった趙樹理の長女趙広建は、この時の模様を次のように記している。

私は、あの恐ろしい日を永久に忘れない。脱穀場は、茅坑からすくいあげられた死体でいっぱいだった。頭のないもの、足のないもの、焼けただれたもの、黒こげになつたもの、私とおばあさんは、この恐ろしい死体をひっくり返し、捜しまわつた。足元に汚物と血が流れ、その生ぐさい悪臭に、息もつけない。暗くなりかける頃、私達はやっと遺体の中から変わり果てた姿のおじいさんをみつけた。水を沢山流しておじいさんの遺体を洗い、衣服を着せてあげ、夜の暗闇をおかして灯をかけた、西山の「窑洞」(山の斜面を利用して掘つた横穴で、住居、貯蔵庫などに使われる)に葬つた。

身元がわからなかつた百九人の遺体は、望川村に合葬され

た。犠牲者はあわせて三百人にのぼり、そのほとんどが壮年、青年層であつた。

望川村では四十九人が犠牲になつた。この村の戸数は八十数戸であつたから、村のほぼ半数が一家の支柱を失つたことになる。従来、沁河沿岸の村々は、恵まれた自然環境にあり、尉遲村にせよ、望川村にせよ、なんとか食べていくことができたが、この事件以後、食料と家畜を略奪され、働き手を失い、重ねて翌年は民国三十三年の大旱魃に当り、もともと四百人以上あつた望川村の人口は、百人にまで減つてしまつた。回復したのは一九五八年で、今日(一九八六年)では百九十人に増えている。

虐殺と、それがもたらした飢饉に、死者への追悼の念は一層つゆり、毎年十月一日(清明節ほど大規模ではないが、一般に死者を弔う「鬼節」の一つとして広く行き渡っている)に、紙銭を焼き、犠牲者に捧げる。肉親の遺体を捜しあてられなかつた者の悲しみはひとしおで、今は畑となつて合葬した地で、紙銭を焚く。村の三十代以上の者は、直接体験していない者も、この事件とその後の苦しみを生々しく記憶しているという。

時期を前後して、望川の他、沁河沿岸の五つの村でも、同様の虐殺が行われたという。この一帯は、日本軍と閩錫山系・蒋介石系の軍隊が交錯して占拠していた地域で、端氏鎮には、日本軍が漢奸となつた中国人を使って各村から食料等を調達させる組織、維持会の中心部があり、協力する村人には維持会の会

員であることを証明する良民証を発行していた。良民証を持っていた者はこの時の難を逃れている。又、日本兵は僧侶に対しては敬虔にふるまい、望川村から一キロ登った山間にある開明寺へ隠れて、助かった者もいた。今でも、この地方の人々は、日本人は信心深い仏教徒であると思っている。望川村にも維持会があつたが、あまりにとりたてが厳しいので、解散してしまつた。又、共産党の地下政府、陽北政府に属す遊撃隊が出没し、村人を率いて食料を隠したりしていた。日本軍のこの虐殺は、八路軍に対する恐怖心と、日本軍の「維持」に協力しない人々に対する復讐心とからなされたものととらえられている。

『李家莊的変遷』、その他の趙樹理の作品中に、この事件は全く投影されていない。もともと、趙樹理は、殺されたという事実を書く時、殺されたと書くだけで、その有様を描写するとは少ない。ただ、『李家莊的変遷』の中には、読者に悪感を催させる場面が二箇所ある。一三章と一五章、いずれも李家莊の龍王廟を舞台とする。一三章は、蒋介石系の中央軍の赤狩りを背景に、その力を借りて、地主の李如珍が、復讐心と恐怖心に駆られて、犠牲救国同盟会を組織して抗日、減租減息運動を行なつた村人を惨殺する場面であり、一五章は、八路軍の進行で権力をとりもどした村人が、恨みを暴発させて、李如珍を殺してしまふ場面である。前者が登場人物の語りを通して、見聞として表現されているのに対し、後者は、最少限の語数で、事実そのものを投げ出すように描かれているため、より鮮烈な印象

象を与える。降伏した日本軍と連系した閻錫山の派遣軍を相手に戦われていた上党戦役に、人々を立ち上がらせることを任務として書き始められたこの小説<sup>(8)</sup>では、日本軍に関する記述は時局の説明に組み入れられ、その侵略行為は直接語られず、漢奸、土匪となりはてた国民党系の軍人を通して表現されている。太行山の山奥の寒村にまでもぐりこんで、人々の生活を危機に陥れたのは、多く国民党系の軍隊の残党であり、日本軍の侵攻を許している彼らに組する、村の従来の統治機構を破壊することが、根本的な問題だったからだろう。

強烈な衝撃を与えたに違いない父の死を、趙樹理はその片鱗すら作中に書き込まなかつた。三十七人の犠牲者を出した尉遲村に生きる人々も、事前に注意があつたのか、この時のことを筆者に自分から話そうとはしなかつた。しかし、趙樹理研究を志す日本人に、村人がまず訴えたかつたのは、この一事であつたのではないだろうか。

#### 註

- (1) 滞在期間は五月十三日から二十日までの一週間。
- (2) 正しくは湖兒。趙樹理の最初の妻馬素英(一九二九年病没)との間に生まれた長男、趙大湖を指す。星辰に水が欠けていたことから、趙和清がこの名をつけた。
- (3) 楊俊「我所看到的趙樹理」(『中国青年』一九四九年第八期)。
- (4) 高捷等『趙樹理伝』(山西人民出版社、一九八二年)九

七頁参照。

(5) 一九八六年五月十七日、望川村の元幹部三名を中心とする座談会を行なった。その席上での発言。

(6) 閻氏の口述では、九月二十九日であるが、翌日が十月一日の鬼節であったといひ、一九四三年の九月は大月であったことから、又、叔父と従弟をこの時に亡くした李育秀(尉遲村在住)も、旧曆九月二十日と口述している(『故居話童年——李育秀老漢憶趙樹理』李士徳、『山西大学学报』一九八六年第三期増刊)ことから、九月三十日が正しいと思われる。尚、『趙樹理伝』は旧曆十月三十日、『趙樹理年譜』(董大中、山西人民出版社、一九八二年)は旧曆十月二十九日とし、趙広建の「童年与往事」(『山西文学』一九八六年第六期)は冬至の翌日とする。

(7) 趙広建「童年与往事」。注(6)参照。

(8) 趙樹理「回憶歴史、認識自己」(『趙樹理文集』第四卷所収)参照。

調査の援助をして下さった長治市文聯、晋城市文聯、そして沁水県文化局の潘保安氏・苑金榮女士に深く感謝致します。

## 白朗 試論

一五

平石 淑子

「東北作家」のひとりである女性作家白朗<sup>(1)</sup>は、文革時に受けた心の傷のため、今もなお断固として筆を折ったままである。満州事変を出発点として、抗日戦争、整風運動、反右派闘争、そして文革と激動の時代を生きぬき、中国婦女連合の代表として国際舞台を経験もし、新生中国の輝かしい未来を信じた女性の現在としては、それはあまりに痛ましい。彼女の精神分裂症の症状は徐々に好転していると伝えられ、最近相次いで彼女の作品集が出版され始めているのは、心に深い痛手を負った彼女が再び甦えろうとする証であるように思える。現在見ることでできる白朗の作品は多くない。が、その中にすでに十分彼女の思想世界は反映されている。本論は、彼女が筆を折るに至った軌跡を作品の上を探り、その時代のひとつの側面を明らかにしようとするものである。

自身の作品について、白朗は散文集『月夜到黎明』<sup>(3)</sup>「前記」の中で、このように述べている。

私は一九三五年に東北を離れてから抗日戦争初期までの時期に発表した散文を、探し集めることのできた一部の文章の中から十数篇を選んで第一輯とした。(中略)これらは多く個人的な角度から個人の印象と心情を表わしたもので